

## 野池にUFO出現！

それは私がまだ高校生だった頃のこと。いつものように釣友を誘い、千葉の野池へ泊二日のナイターでのバスフィッシングへと出かけた。土曜日の半ドン授業を終え、釣り場へは、かなり遅い時間に到着。当時通い続けたそこは、二人にとつてブラックバスが確実に釣れる秘密の沼で、この日も夜9時頃までにはそこそこのバスをポツパーでゲットして満足していた。

ふと空を見上げれば都会から離れた闇夜に浮かぶ満天の星空があり、釣りに夢中になつていた二人は、いつしかロッドを振る手を止めて、夜空の輝きに見とれていた。その年は確か流れ星がとても多いと言われた年で、確かに空を眺めれば誰にでも容易に見つけられた。

「すげーよ。あっちにもこっちにも流れ星だぜ。」

「こんなに流れ星を見れると願い事おする気になんねーな。」

「おい、あれを見ろよ！」

素つ頓狂な声を上げる友人が指さす方向を見ると、今まで見ていた流れ星とはあきらかに違う、奇妙な動きをする星があった。普通、流れ星は夜空の真上あたりから数秒の間、光の尾を放つてはすぐ消えてしまう筈。だがそれは、星と明らかに違う動きをしている。謎の光は天頂からでなく、自分たちの前に見えるの上をふらふらと光を放ちながら飛んでいるのである。まさか。

「おい、あれがまさかUFOってやつか。」

「俺も始めて見たよすげーな。」



「おい、やばいよ、降りてきたぜ。」

ふらふらと頼りない飛び方で飛行を続けるUFOは、点滅をしながらゆつくりと山の手前側へ降りはじめた。

「やばいよ、近いぜ。逃げようか。」

得体の知れない物体はさらに降下を続け、二人から約200m先の松林より手前へ降りてきた。

「うわーたいへんだ。おれたち喰われちゃう！逃げよう。」

恐怖を感じ始めた二人をよそに、UFOはさらに降下を・・・あれ??

おかしいぞ。これ以上降りてきたら自分たちの目の前だ。その割にはUFOはちっとも大きくならない。

今まで首が痛くなるほど夜空を見上げていた一人が徐々に視線を下げていくと、そこには池のあちらこちらに、かわいいお尻を輝かせている蛍たちがいた。そう、二人は指先から30センチほどの所にいる蛍をUFOだと思い、大声で叫んでいたのだった。この後、二人は顔を見合せて大笑いしたことは言うまでもないが、釣りに夢中になると、つい周りの景色が見えなくなってしまうのも事実である。

今また蛍が水辺で戯れるあの釣り場へまた行ってみたいのだが、気がつけば造成され立派なアスファルトの道がどこまでも続いている殺風景な場所となっていました。さて、満天の星空とホタル、どこへ行けば見られるのやら・・・。最近ではフライフィッシングに出かけても、とんと見かけなくなりました。